

サポーツ京田辺 勉強の仕方に関するアンケート調査の結果

同志社大学こころの生涯発達研究センター 田中あゆみ（心理学部准教授）

○ 調査の目的

勉強とはどのようにして成立するのか、どうすれば効果的に学習はすすむのかということへの基本的な考え方は、実際に私たちがどう勉強するか、またそれがうまくいくかどうかを決める重要な要因の1つだといわれています（植木，2002）¹。今回の調査は、サポーツの生徒および指導員を対象に、勉強についての考え方と勉強の仕方の全体的な傾向を把握し、2つの関係性について調べることで、また、各指導員の授業のわかりやすさについて生徒にアンケートを行い、勉強についての考え方が生徒と指導員で同一の場合とそうでない場合で、わかりやすさに違いがあるのかを調べることで、適切な個別指導のあり方を検討することを目的としました。

○ 調査項目の説明

1. 勉強についての考え方の質問

勉強とはどのようなものなのかということに対する考え方や価値観の主なものとして、植木（2002）が提案した下記の3つのタイプの考え方を各自がどの程度持っているのか、それぞれ3項目を用いて測定しました。

・環境志向：何らかの「効果的な学習環境」が存在し、そのようなよい環境に身を置くことで、勉強とはいつの間にか身についてくるものであるという考え方です。

「大事なことは、勉強しやすい環境にいるということだ」

「教え方のうまい先生に習っていれば、成績は良くなるものだ」

「成績を上げるためには、分かりやすい授業をする先生が必要だ」

・方略志向：勉強とは自分でその方法について試行錯誤し、あれこれと工夫をしながら要領を得ていくものだという考え方です。

「人それぞれ、自分にあった勉強方法を工夫した方が効果的だ」

「勉強する前に、どういうふうにしたらうまくいくか考える必要がある」

「勉強のしかたは自分で変えていくと効果がある」

・学習量志向：勉強の量や時間を重視して、反復練習によって勉強が成立すると考える方です。

「とにかく根性をもって頑張り続けることが効果的だ」

「同じことを繰り返しているうちに、いつの間にかそれが身につく」

「たくさんの量を積み重ねることが効果的だ」

2. 勉強の仕方についての質問

勉強の方略（仕方）として、自分が考えていることや意識していることをもう一段上から客観的に意識するというメタ認知方略の1つである「モニタリング」と、記憶などをよ

り深く長期的に保つために効果的な「精緻化」の2つの方略をどの程度使用しているかを調べました。

・モニタリング：自分が考えていること、意識していることを自分で把握し、評価、判断をするテクニックのことです。以下の項目でどの程度勉強中にモニタリングをしているかを以下の3項目で調べました。

「問題を解いていてわからなくなったとき、どこでつまづいているのか一度考えてみる」

「勉強してきたことを確認するために、自分自身に質問する」

「何かを読んでいるときに、自分がどの箇所まで理解できているのか考えながら読む」

・精緻化：何かを覚えるときに、関連する知識やイメージを付け加えることで材料を覚えやすいように変換し、自分の既に知っていることに結びつけていくテクニックのことです。以下の2項目を用いて調べました。

「勉強していて何か難しい言葉があれば、自分がわかるような言葉に置き換えて理解する」

「勉強で何か覚えられないことが出てきたら、自分が覚えやすいように工夫して覚える」

○ 調査の実施と分析の方法

調査を行ったのは2010年12月と2011年1月の冬期講習期間で、回答に不備のなかった小学3年生から高校3年生までの39名（男子31名、女子8名）のデータについて分析を行いました。また13名の指導員に対しても勉強についての考え方と勉強の仕方についての質問紙調査を実施しました。

勉強についての考え方については「あなたはどのように勉強すれば、効果的だと考えていますか?」という問いかけを、勉強の仕方については「あなたが学習するときに、以下のことをどの程度行っていますか」という問いかけを示してから、各項目に、「全く思わない(1)」から「とてもそう思う(4)」の4点満点で回答してもらいました。

また指導の分かりやすさを調べるために、「今日も頑張ったよカード」の一部を利用して、以下の図に示すような形式で授業ごとに10cmの線上のあてはまる場所に印をつけてもらいました。「わかりやすかった」の部分に印があった場合を10点、「わかりにくかった」の部分に印があった場合を0点として10cm中の印の位置をもとに得点化をしました。生徒一人が平均すると二人の指導員を評価し、指導員は平均7人の生徒に評価をされました。

今回の授業はどうでしたか?感想に近い場所に印をつけてください。			
わかりやすかった	まあわかりやすかった	すこしわかりにくかった	わかりにくかった

図1. 授業のわかりやすさの測定方法

○ 結果

1) 勉強についての考え方の全体の傾向

図2に、生徒の勉強についての3つの考え方の全体の平均値を示しました。勉強では量を重視して根性をもって頑張りに続けることに効果があるとする「学習量志向」の平均値が他の2つよりも高く(3.23)、これが3つの中で相対的に優勢な考え方であることがわかりました。勉強するにはよい環境に身を置くことが大事であるという「環境志向」、勉強とは自分で工夫をしながら方法をみつけていくものだという「方略志向」についても、平均値はそれぞれ3.00と3.02で、それらの考え方に対してもそう思わないというよりは思っている人の方が多い傾向がありました。

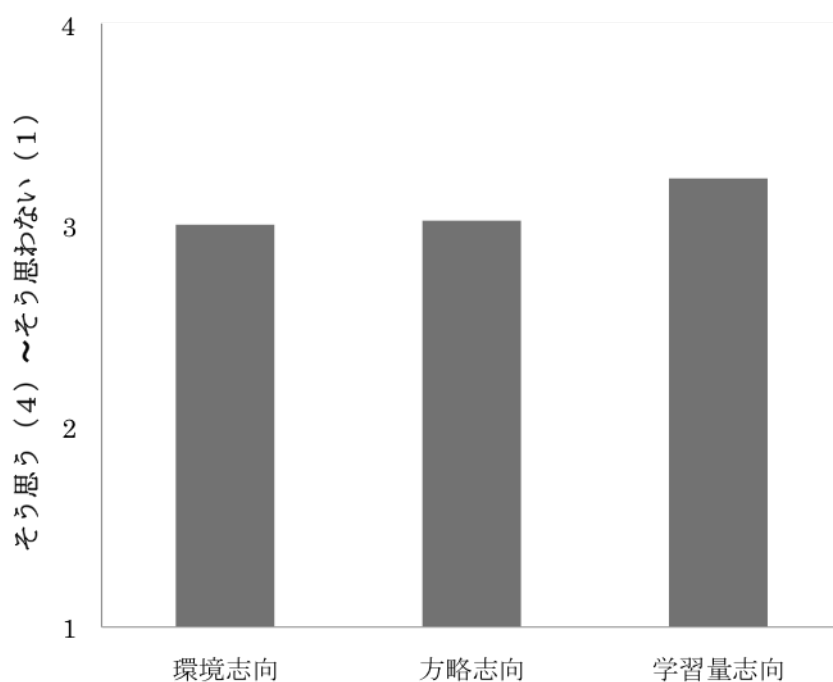


図2 勉強への考え方の平均値
(生徒)

次に図3に、指導員の勉強への考え方の平均値を示しました。指導員については、方略志向の得点が最も高く(平均 3.39)、次に学習量志向(3.07)、そして環境志向の得点は低い傾向がありました(2.61)。生徒と指導員のそれぞれの得点を比較すると、環境志向の得点は生徒のほうが高く、方略志向の得点は指導員のほうが高いことがわかりました。学習量志向の得点については、生徒と指導員で統計的な違いはありませんでした。

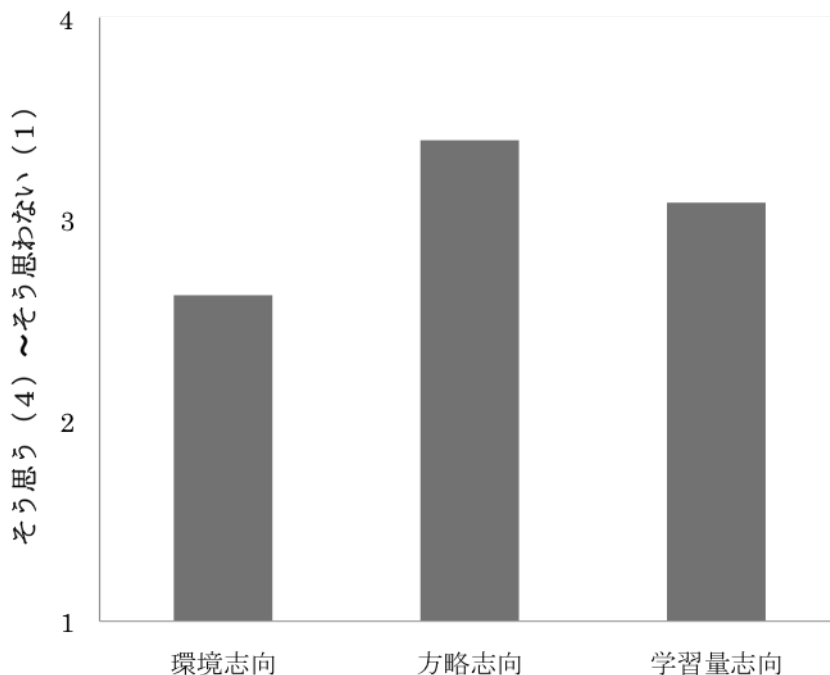


図3 勉強への考え方の平均値
(指導員)

2) 勉強の仕方についての全体の傾向

図4に、勉強の仕方としての2つの方略をどの程度使用しているかについての平均値を示しました。特に「モニタリング」の平均値が低く(2.38)、自分が考えていることについてチェックをしたり見直したりすることができている人が少ない傾向がありました。難しいことがあると自分なりに知っていることと関連づけて覚えようとする「精緻化」方略の平均値は2.63であり高くはありませんが、モニタリングに比べればこちらの方略のほうが用いている人が多いことが示されました。

また図5に、指導員の勉強の仕方についての平均値を示しました。モニタリング、精緻化ともに生徒よりも平均値が高いことがわかります(それぞれ3.03と3.27)。また、生徒と同様、精緻化に比べるとモニタリングのほうが用いられていないという傾向がありました。

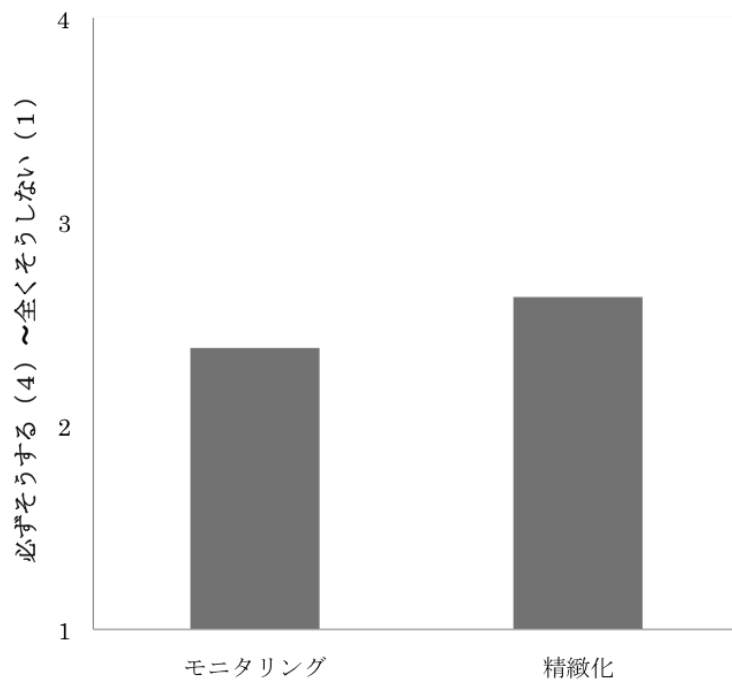


図4 勉強の仕方の平均値
(生徒)

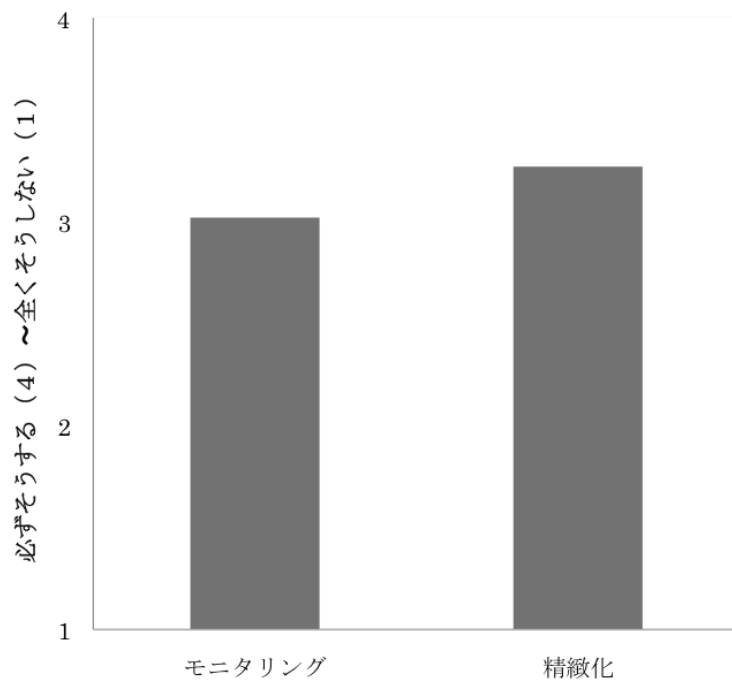


図5 勉強の仕方の平均値
(指導員)

3) 勉強についての考え方と勉強の仕方との関係

生徒が勉強に対してどのような考え方をしているかによって実際の勉強の仕方が違うのかを調べるために、相関係数 (r) という統計値を算出し、勉強についての3つの考え方が2つの勉強の仕方とそれぞれどの程度関係しているのかを調べました (図6)。

相関係数は、-1から1の間の値をとり、絶対値が1に近づくほど関係が強いことを意味する統計値です。プラスの値をとる場合には、一方の得点が高いほどもう一方の得点も高くなること、マイナスの値をとる場合には、一方の得点が高いほどもう一方の得点が低くなることを意味しています。

相関係数を算出した結果、方略志向の考え方の得点が高い生徒ほど、モニタリングや精緻化の方略を使っているという統計的に意味のある相関関係がみとめられました (1%水準)。つまり勉強とは自分で試行錯誤して要領を得ていくものだと考えている場合、実際に勉強の際に自分が考えていることの把握や判断ができていて、また知識の関連づけの方略もよく用いているということです。一方、環境志向、学習量志向と勉強の仕方との間には統計的に意味のある関係はありませんでした。

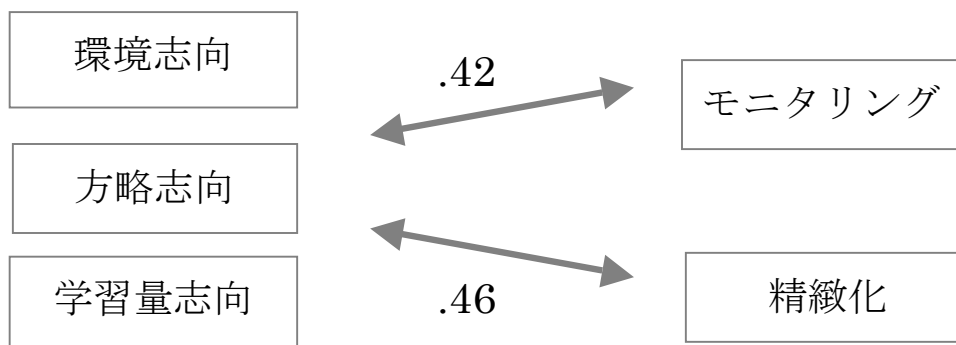


図6 勉強についての考え方と勉強の仕方との関係

4) 生徒と指導員の考え方の適合・不適合による影響

例えば、学習量志向が強い生徒は同じように学習量志向が強い先生のほうが授業をわかりやすく感じるといったことはあるのでしょうか。生徒と指導員それぞれの勉強についての考え方の適合や不適合によって授業のわかりやすさの評価が異なるかという可能性を、以下のような方法で検討しました。

まず指導員を対象に、勉強についての考え方の得点を中央値で高群と低群にわけ、3つの考え方の高低を組み合わせで8つのグループに分けました (表1)。次に同じグループに属する指導員に対する授業評価をまとめ、グループの平均値を算出しました。そして、生徒の勉強についての考え方と、それぞれのグループの評価との相関係数を算出しました。なお表1より二人以上含まれているグループについてのみ結果を報告します。

表1 指導員の3つの勉強についての考え方の高低による人数分布

学習量志向	方略志向	環境志向	
		低	高
低	低	2 (15.3) A	3 (23.1)
	高	1 (8.0)	1 (8.0)
高	低	1 (8.0)	2 (15.3) B
	高	2 (15.3)	1 (8.0)

() 内は合計人数 13 人を分母としたときの割合 (%)

相関分析の結果、2つの統計的に意味のある関係がみとめられました (5%水準)。

まず、学習量志向の得点が高い生徒は、低い生徒に比べて、環境志向、方略志向、学習量志向のいずれも低い指導員グループ (表1のA) を高く評価するという関係がありました (相関係数= .72)。これは逆に、学習量志向が低い生徒は、この指導員グループの授業は評価がより低くなっているということも意味しています。生徒の学習量志向性が高い (あるいは低い) 場合は、同じように学習量志向が高い (低い) 指導員のほうがよいというわけではないといえます。

また、方略志向の得点の高い生徒は、低い生徒と比べて、環境志向と学習量志向の得点が高く方略志向の得点が高い指導員グループ (表1のB) の評価が低いという関係がありました (相関係数= -.57)。これも逆に考えると、方略志向得点が高い生徒は、この指導員グループの授業のほうがわかりやすいと感じているということも表します。方略志向については、生徒と指導員での適合性を配慮する必要性を示唆する結果が得られました。

○ まとめと今後の課題

今回の調査で、生徒の間で勉強についての考え方として相対的に平均値が高かったのは学習量志向でした。これは、とにかく同じことを繰り返し勉強するのが効果的であるとする考え方で、植木 (2001) の高校生を対象とした調査でも3つの中で一番高い平均値が示されていました。学習量志向は一般的に学習者が考えるもっとも基本的な勉強態度であるといえますが、勉強をする際に、どのように学習をすすめていくのかについての意図的な工夫をする、すなわち勉強を方略的に行うことで、もともとの能力の差や学習量の差をこえる効果があることがこれまでにわかっており (ジーマン・シャンク, 1989, 塚野編訳, 2006) ², 方略志向という、勉強の仕方を自分で工夫すると効果があるという考え方も支援することは重要であると考えられます。

今回の調査で、モニタリングや精緻化といった勉強の方略を実際に利用しているという得点は特に前者について低い傾向がありました。これは今後のサポートでの個別指導でさらに配慮すべき課題ではないかと思われます。相関分析の結果、方略志向の得点が高い生徒ほどこれらの方略をより用いているという関係がみられたことから、まずは、自分がどう勉強をするかということについて考えることの大切さを生徒に理解してもらうことが必要であると考えられます。

最後に、生徒と指導員の間での、勉強についての考え方の適合性と指導の効果についての検討から、まず学習量志向については、この得点が高い生徒ほど、3つの志向性がいずれも低い指導員のグループの授業をわかりやすいと評価する傾向があり、この志向性については生徒と指導員で適合するよりむしろ不適合のほうがよいのかもしれませんが。一方、方略志向得点の高い生徒ほど、方略志向得点の低い指導員グループの授業をわかりにくいと評価するという傾向がみとめられました。方略志向をまだ身につけていない生徒にとっては、方略について相対的に重視していない指導員からの指導のほうがうまくいく一方で、方略志向を持つ生徒にとってはそのような指導員との組み合わせはあまり望ましくない可能性が高いといえます。ただしこれらの分析については、表1に示した全てのグループについて十分な人数をそろえて再度行う必要があります。また、実際に3つそれぞれの勉強に対する考え方をもつ指導員がどのように授業を進めているのかについての特徴を把握した上でさらに検討することが今後の課題といえます。

○ 参考文献

¹植木理恵（2002）高校生の学習観の構造 教育心理学研究, 50, 301-310.

²ジーマーマン, B. J., & シャンク, D. E. 塚野州一（編訳）（1989, 2006）自己調整学習の理論 北大路書房

報告日：2011年3月8日